

市原市松崎中里遺跡(4)

— 県単交通安全対策事業(主要地方道市原茂原線)埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和5年10月

千葉県教育委員会

いち はら し まつ ぎ き な か ぎ と い せ き

市原市松崎中里遺跡(4)

—県単交通安全対策事業(主要地方道市原茂原線)埋蔵文化財発掘調査報告書—



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第48集として、県単交通安全対策事業に伴って実施した松崎中里遺跡(4)の発掘調査報告書です。

調査成果としては、古墳時代の竪穴住居跡や土坑などの遺構が検出されました。遺跡の周囲には、これまでに実施された発掘調査により、広い台地上に弥生時代以降の集落が広く展開していることがわかっており、今回の調査ではその一端を明らかにする成果が得られました。

刊行にあたり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和5年10月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 稲村 弥

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部道路環境課による県単交通安全対策事業(主要地方道市原茂原線)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。なお、公益財団法人千葉県教育振興財団(旧財団法人千葉県文化財センター)及び千葉県教育庁教育振興部文化財課が行った調査の第4次調査にあたるため、(4)と表記する。

松崎中里遺跡(4) 市原市松崎字根本台48-4ほか (遺跡コード219-096)
- 3 発掘調査及び報告書作成に至る整理作業は、千葉県県土整備部道路環境課の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は文化財主事 速水成美が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部道路環境課、公益財団法人千葉県教育振興財団、市原市教育委員会、神野 信氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第3図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「海士有木」「姉崎」「鶴舞」「上総横田」を編集

第6図 市原市発行 1/2,500 市原基本図
- 9 写真図版1の航空写真は、国土地理院による令和元年撮影のものを使用した。
- 10 挿図中の「K」は攪乱の略である。
- 11 遺構種別の記号は以下のとおりである。

SI：竪穴住居跡 SK：土坑 SH：ピット

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	遺跡の位置と環境	2
1	遺跡の位置と地理的環境	2
2	周辺の遺跡と歴史的環境	2
第3節	調査の方法と概要	6
1	調査の方法と調査概要	6
2	基本層序	6
第2章	調査の成果	10
第1節	概観	10
第2節	検出された遺構と遺物	10
1	竪穴住居跡	10
2	ピット群及び主な土坑	15
3	その他の土坑	15
4	遺構外出土遺物	19
第3章	総括	20
写真図版・報告書抄録		

挿図目次

第1図	地質概況図	2	第8図	SI030	11
第2図	周辺地形図	3	第9図	SI031・SI032	13
第3図	松崎中里遺跡と周辺の遺跡(1/25,000)	4	第10図	SI033	14
第4図	グリッド配置図	6	第11図	調査区東端部ピット群	16
第5図	基本層序	6	第12図	SK046・SK049	17
第6図	調査対象範囲と調査履歴位置図	7	第13図	SK039～045・048・SH187・193	18
第7図	調査区遺構配置図	8	第14図	遺構外出土遺物	19

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5	第2表	調査区東端部ピット群遺構一覧表	16
-----	---------	---	-----	-----------------	----

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真	図版3	SI030、SI031、SI032
図版2	調査前風景、調査区北西側遺構配置状況、 調査区東端部ピット群	図版4	SI033、SK046、SK049、SK039～SK041
		図版5	SK042～SK045、SK048、出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

市原市の中央を東西方向に走る県道13号市原茂原線は、市原市と茂原市を結ぶ主要地方道であり、近年交通量が増大している。そのうち磯ヶ谷工区間は幅員が狭く、大型車相互の通行が困難であり、通学時の児童や生徒が危険な状態にさらされている状況が続いてきた。このことから、養老小学校が近く、通学路にも指定されている、市原市松崎字根本台地先の区間において、自転車・歩行者等の安全を確保するための歩行者道路整備を進めることとなった。

事業の実施にあたり、平成27年10月に、千葉県市原土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では、平成27年11月に事業計画地内に松崎中里遺跡が所在する旨の回答を行った。この回答を受け、取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

平成29年度に発掘調査を実施し、令和4年度及び令和5年度に整理作業を実施した。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

○平成29年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 萩原 恭一 副課長 島立 桂 発掘調査班長 山田 貴久

担当者 主任上席文化財主事 伊藤 智樹 文化財主事 館 祐樹

実施期間 平成29年11月1日～12月20日

内容 調査対象面積459㎡ 確認調査 上層325㎡ 下層20㎡

本調査 上層325㎡ 下層0㎡

○令和4年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 金井 一喜 副課長 四柳 隆 発掘調査班長 黒沢 崇

担当者 文化財主事 村松 裕南

実施期間 令和5年1月4日～1月31日

内容 記録整理からトレースの一部

○令和5年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 稲村 弥 副課長 四柳 隆 発掘調査班長 黒沢 崇

担当者 文化財主事 速水 成美

実施期間 令和5年6月1日～6月30日、9月1日～9月30日

内容 トレースの一部から報告書刊行

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境 (第1・2図)

松崎中里遺跡が所在する千葉縣市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、東は長生郡長柄町・長南町、夷隅郡大多喜町及び茂原市、西は東京湾及び袖ヶ浦市及び木更津市・君津市、北は村田川を隔てて千葉市に接する。市域は南北約36kmに対して、東西は約20kmと短く、楔形を呈している。地形的には南部は上総丘陵、北部は洪積台地が大半を占め、それを北流する養老川により開析された沖積低地の3つに大別される。市の中心部には清澄山溪に源を発し、著しい蛇行を見せながら東京湾に注ぐ養老川が流れる。このほか、市内には村田川水系、椎津川水系、前川水系などの中小河川があり、いずれも東京湾に注いでいる。



第1図 地質概況図

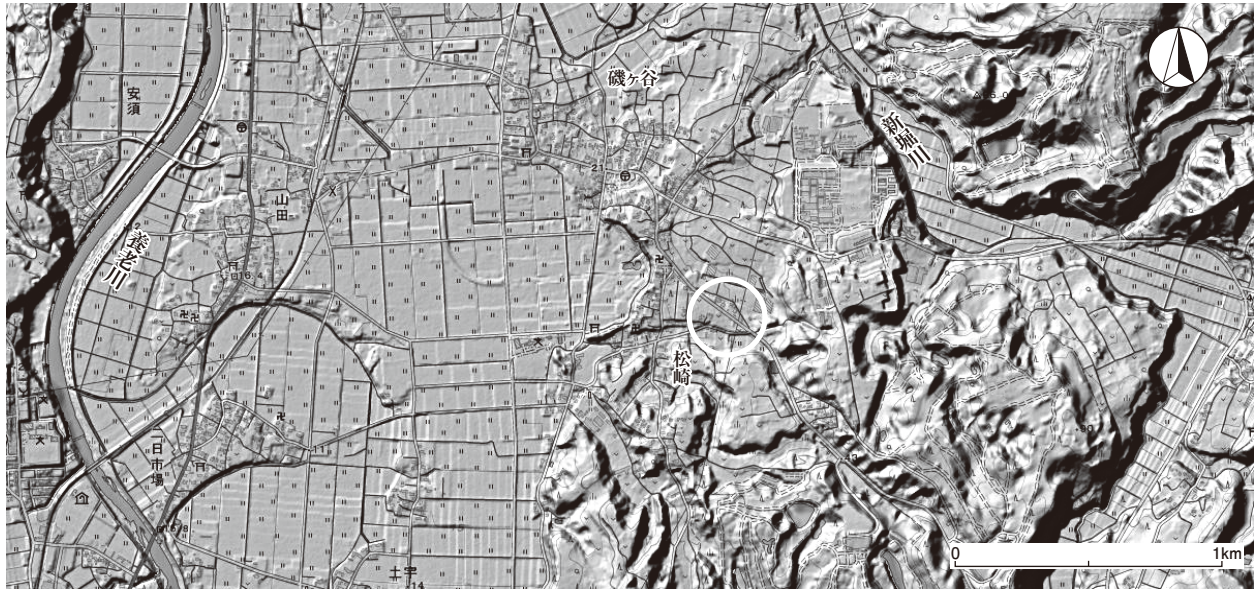
房総半島の地質は、第四紀の上総層群及び下総層群からなる丘陵と、下総層群及び新期段丘堆積層からなる段丘及び沖積層からなる低地で構成されている。

上総層群は房総半島中部の上総丘陵に広く分布する海成層で、水深が1,500m以上にあった深海底や海底扇状地、陸棚など様々な堆積環境で形成された地層が、その後隆起して広く露出している。一方、下総層群は房総半島北部の下総台地に広く分布し、主に浅海性の砂層とそれに挟まれた淡水から汽水性の泥質層及び砂礫層から構成されている。市原市域は、この上総丘陵の北部と下総台地の南部にまたがっており、その中心を養老川の低地が南北に貫いている。台地の分布範囲は市の北部から中部域に及び、上流域では谷の開析が著しいが、松崎中里遺跡が所在する中流域では下総層群に入るため、平坦な台地となる。

松崎中里遺跡は養老川中流右岸の台地上に位置している。今回の調査地点の標高は34m前後で、西側を養老川、北及び東側を新堀川により開析された広い台地上の北西部に位置し、台地の中でも一段下がった平坦面に所在する。この広い台地は、南東部の最も高い部分で標高100mを超えるが、北西部では標高25m前後であり、両河川からの支谷が多く入る起伏の激しい地形となっている。台地の中央から南部の比較的標高の高いところでは、立川ローム層から下末吉ローム層までの関東ローム層の堆積が見られる。中央から北東部にかけての低位の平坦面でも立川ローム層の堆積が見られるところもあり、今回の調査地点でも立川ロームの堆積が確認できた。しかし、立川ロームIV層以下のいわゆるハードローム層の変質が著しかった。

2 周辺の遺跡と歴史的環境 (第3図・第1表)

松崎中里遺跡は、これまでに8次にわたる発掘調査が行われている。市原市教育委員会による平成16・19・21・22年度の確認調査では、調査範囲の全面に奈良・平安時代の集落が広がっていることが確認されている。また、未報告ではあるが、平成23・26・27年度に行われた財団法人千葉県文化財センター及び千葉県教育庁教育振興部文化財課による発掘調査で、弥生時代方形周溝墓12基、古墳時代竪穴住居跡10軒・土坑2基・ピット2基・古墳7基・溝跡1条、奈良・平安時代竪穴住居跡14軒・土坑3基・ピット4基、



第2図 周辺地形図

*国土地理院標準地図及び陰影起伏図を援用

中世～近代溝跡2条などが検出されており、現在整理作業中である。

松崎中里遺跡の周辺には、多くの遺跡が所在し、道路改良事業などに伴う発掘調査で報告書が刊行されている。ここでは、時代ごとに周辺遺跡の概要を述べる。

縄文時代 馬立塚ノ台遺跡(65)は昭和54年に土宇遺跡として調査され、早期後半の条痕文土器が多量に出土したほか、中期後半の竪穴住居跡が20軒検出されている。武士遺跡(79)は、中期後半～後期中葉の竪穴住居跡約420軒・掘立柱建物跡・土坑等が検出されている大規模集落である。

弥生時代 武士遺跡・山田大宮遺跡(14)・叶台遺跡(42)・馬立塚ノ台遺跡がある。武士遺跡では中期の再葬墓4基、後期の竪穴住居跡43軒・方形周溝墓3基が検出されている。山田大宮遺跡では中期の方形周溝墓群が展開している。叶台遺跡では中期の宮ノ台式期の竪穴住居跡が検出されている。馬立塚ノ台遺跡からは後期の竪穴住居跡84軒が検出されており、養老川中流域の拠点集落と捉えられている。

古墳時代 武士遺跡・叶台遺跡がある。武士遺跡は終末期の方形墳墓37基が検出されており、埋葬施設が発見される例が多い。叶台遺跡は後期を中心とした竪穴住居跡が32軒検出されている。古墳では、本地域近隣に春日神社古墳群(3)や松崎的場古墳群(5)・丸山塚古墳(7)・折戸古墳(15)が分布している。春日神社古墳群は径10～20mの小規模円墳であり、円筒埴輪等が出土している。養老川西岸には安須古墳群(52)がある。安須古墳群は総数20数基の円墳を主体とする古墳群で、須恵器のほか、鉄鎌や刀子形石製模造品が出土している。また、本遺跡の北側には武士古墳群(39)があり、うち1基は全長36mからなる前方後円墳である。遺物は人物埴輪等が出土している。

奈良・平安時代 門脇遺跡(19)・二日市場廃寺(29)がある。門脇遺跡は昭和60年に財団法人千葉県文化財センターによる調査で、8世紀前半の竪穴住居跡から「海里長」と書かれた墨書土器が出土している。二日市場廃寺は掘立柱建物跡が検出されており、紀寺系の軒丸瓦等が確認されている。

中世以降 武士遺跡・海土有木遺跡(47)がある。武士遺跡は中世の溝状遺構6条・道路状遺構1条が検出されている。海土有木遺跡は近世の土坑や溝跡が検出されており、土師質土器・灰釉陶器等が出土している。この調査地内は蟻木城跡の城郭内であり、関連性が指摘されている。



第3図 松崎中里遺跡と周辺の遺跡(1/25,000)

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	松崎中里遺跡	包蔵地 集落跡	縄文, 弥生, 古墳	48	海士有木洲崎遺跡	包蔵地	弥生, 古墳
2	円成寺古墳群	古墳	古墳	49	浅井台遺跡	包蔵地	弥生, 古墳, 奈良・平安
3	春日神社古墳群	古墳	古墳	50	八幡山古墳	古墳	古墳
4	松崎の場遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	51	安須遺跡群	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安, 中世
5	松崎の場古墳群	古墳	古墳	52	安須古墳群	古墳	古墳
6	松崎塚越遺跡	包蔵地 集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安	53	鷹の巣横穴群	横穴	古墳
7	丸山塚古墳	古墳	古墳	54	安須要害古墳	古墳	古墳
8	法伝台遺跡	包蔵地 集落跡	縄文, 古墳	55	高坂遺跡	包蔵地 集落跡	縄文, 古墳, 奈良兵・平安
9	法伝台古墳群	古墳	古墳	56	棒ヶ谷遺跡	包蔵地 集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安, 中世
10	滝山古墳群	古墳	古墳	57	中高根腰巻遺跡	包蔵地	古墳, 奈良・平安
11	磯ヶ谷堀込遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	58	松本遺跡	包蔵地	古墳, 奈良・平安
12	喜多見古墳	古墳	古墳	59	土宇下原遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安, 中世
13	磯ヶ谷山王遺跡	包蔵地	古墳, 奈良・平安	60	大城台古墳群	古墳	古墳
14	山田遺跡群	包蔵地	弥生, 古墳, 奈良・平安	61	土宇大城台遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳
15	折戸古墳	古墳	古墳	62	土宇萩ノ台遺跡	包蔵地	縄文
16	新堂塚遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	63	浅間台横穴群	横穴	古墳
17	松崎花ノ台遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	64	塚ノ台古墳群	古墳(塚)	古墳
18	花ノ台古墳	古墳	古墳	65	馬立塚ノ台遺跡	包蔵地 集落跡	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳
19	門脇遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安	66	川在山吹遺跡	包蔵地	縄文
20	門脇古墳群	古墳	古墳	67	川在上ノ岱遺跡	包蔵地	縄文
21	磯ヶ谷滝山台遺跡	包蔵地	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安	68	左屋戸遺跡	包蔵地	縄文
22	磯ヶ谷滝山台古墳群	古墳	古墳	69	富坂遺跡	包蔵地	縄文
23	水吞坂遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	70	南障子塚古墳群	古墳	古墳
24	中旭台遺跡	包蔵地	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安	71	川野遺跡	集落跡	縄文, 古墳, 奈良・平安
25	北旭台遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安	72	川在遺跡群	包蔵地	縄文, 古墳, 奈良・平安
26	北旭台古墳群	古墳	古墳	73	山王塚古墳群	古墳	古墳
27	池田尻遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳	74	勝間遺跡群	包蔵地	縄文, 古墳, 奈良・平安
28	磯ヶ谷遺跡群	包蔵地	古墳, 奈良・平安	75	鯉鯛古墳	古墳	古墳
29	二日市場遺跡 二日市場廃寺	包蔵地 集落跡 生産遺跡	古墳, 奈良・平安	76	勝間東台遺跡	包蔵地	縄文, 古墳
30	頓木遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	77	北畑遺跡	包蔵地	縄文, 古墳, 奈良・平安
31	北中井野遺跡	包蔵地	縄文	78	勝間遺跡	集落跡	縄文
32	新堂塚古墳群	古墳	古墳	79	武士遺跡(土器石遺跡)	包蔵地 集落跡	旧石器, 縄文, 弥生, 古墳 奈良・平安, 中世
33	峠台遺跡	包蔵地	縄文, 古墳	80	土器石貝塚(瓦石貝塚)	貝塚	縄文
34	大宮新田遺跡	包蔵地	縄文	81	武士廃寺跡	寺院跡	縄文, 奈良・平安
35	武士駒込遺跡	包蔵地	古墳	82	福増中ノ台遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良
36	武士駒込古墳群	古墳	古墳	83	福増山ノ神遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安
37	武士北畑遺跡	包蔵地	弥生, 古墳, 奈良・平安, 近世	84	福増遺跡群	包蔵地 集落跡	旧石器, 縄文, 古墳, 平安, 中世
38	新堀遺跡群	包蔵地	弥生, 古墳	85	猿ヶ谷遺跡	集落跡	弥生, 古墳
39	武士古墳群	古墳	古墳	86	福増古墳群	古墳	古墳
40	小鳥向遺跡	包蔵地	弥生, 古墳	87	海士遺跡群	包蔵地	弥生, 古墳, 奈良・平安, 近世
41	新堀馬場古墳群	古墳	古墳	88	新殿古墳群	古墳	古墳
42	叶台遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 平安	89	小堤遺跡	包蔵地	古墳, 奈良・平安
43	小ノ台遺跡	包蔵地	縄文, 弥生, 古墳	90	大坪松原遺跡	包蔵地	古墳, 奈良・平安
44	正人塚古墳	古墳	古墳	91	妙香遺跡	集落跡	縄文, 弥生, 古墳, 奈良・平安
45	数郷古墳群	古墳	古墳	92	妙香古墳群	古墳	古墳
46	学校塚古墳	古墳	古墳	93	党部田山横穴群	横穴	古墳
47	海士有木遺跡群	包蔵地	古墳, 奈良・平安, 中世	94	奉免古墳群	古墳	古墳, 奈良

第3節 調査の方法と概要

1 調査の方法と調査概要(第4・6・7図)

調査にあたっては、平成23年から実施されている磯ヶ谷バイパスの工事に伴う発掘調査の際に設定した調査グリッドを援用して、世界測地系の公共座標に基づくグリッド設定を行った。X = -60,920m、Y = 27,800mを起点とする、20m×20mの方眼を大グリッドとし、アルファベットの組み合わせにより「C2」「K11」のように表示することとした。

今回報告する松崎中里遺跡(4)は9Qの大グリッドを西端とし、11Tを東端とする範囲にあたる。大グリッドの中は、更に2m×2mの小グリッドに100分割し、例えば「10R-89」のように座標軸による小グリッドで地点を表示することとした。

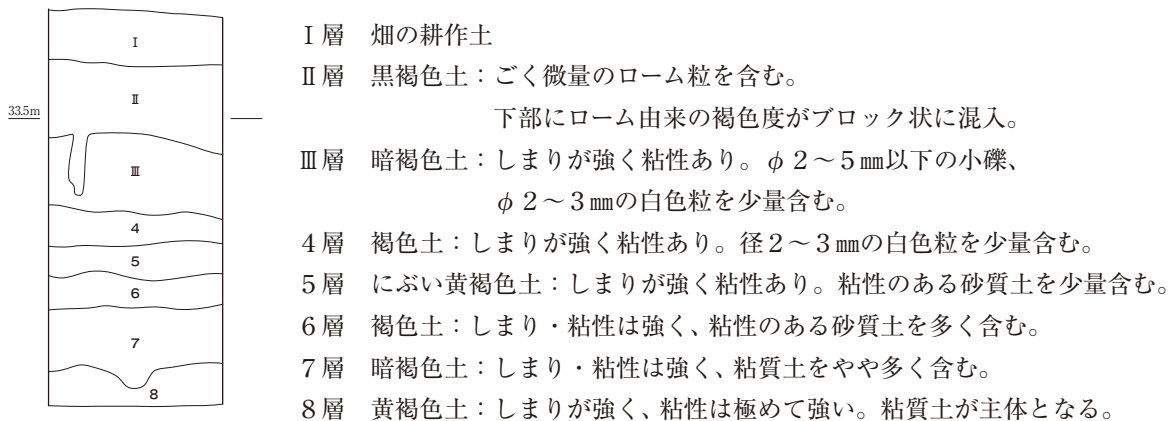
縄文時代以降の上層の調査については、狭長な調査区である

ことから重機による全面表土除去を行い、確認調査を行った。その結果、古墳時代の遺構や土師器などが確認されたことから、全面を本調査範囲とした。旧石器時代の下層の調査については、調査対象地の面積の2%程度の確認調査を行った。調査は、2m×2mの調査グリッドを5か所設定し調査を行ったが、遺物が出土しなかったため、確認調査で終了した。調査終了後、調査区内を重機で埋め戻し、現場作業を終えた。

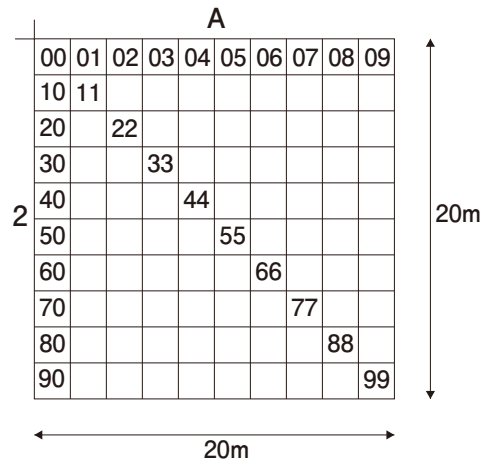
調査の結果、検出された遺構は第7図に示したように古墳時代竪穴住居跡4軒、土坑1基、中世土坑10基、中世ピット66基である。遺物については検出された遺構に伴う遺物のほか、縄文土器、古墳時代土師器・須恵器、中世土器などが出土している。遺物は遺構ごとに取り上げ、遺構外遺物については調査区内でグリッドごと一括して取り上げた。

2 基本層序(第5図)

今回の調査地点は立川ローム層の堆積する標高30m~35mの台地上に立地している。遺構・遺物が検出されたのはⅡ層~Ⅲ層にかけての層位である。調査地点は、小支谷に近い不安定な地形にあっており、立川ロームⅣ層以下のいわゆるハードローム層の変質が著しかった。このため、通常のⅣ層以下はアラビア数字の表記とした。確認された各層の内容は以下のとおりである。



第5図 基本層序



第4図 グリッド配置図



松崎中里遺跡

H23年度調査(1)

H27年度調査(3)

H21年度市原市調査

H23年度調査(1)

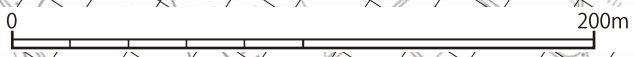
H26年度調査(2)

H23年度調査(1)

H16・19・22年度市原市調査

今回調査区(4)

第6図 調査対象範囲と調査履歴位置図





第7図 調査区遺構配置図

参考文献

- 市原市埋蔵文化財調査センター2009『市原市山田遺跡群』調査報告書第9集
財団法人市原市文化財センター1989『市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海土有木遺跡・北旭台遺跡・姉崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡』調査報告書第32集
財団法人市原市文化財センター1992『市原市叶台遺跡』調査報告書第44集
財団法人市原市文化財センター1993『市原市安須古墳群』調査報告書第39集
財団法人市原市文化財センター2005『市原市文化財センター年報(平成15・16年度)』
財団法人千葉県文化財センター1984『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』調査報告第78集
財団法人千葉県文化財センター1985『市原市門脇遺跡-高滝導水管事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-』
財団法人千葉県文化財センター1996『市原市武士遺跡1』調査報告第289集
財団法人千葉県文化財センター2008『市原市武士遺跡2』調査報告第322集
千葉県教育委員会1996『千葉県重要古墳群測量調査報告書-市原市安須・武士古墳群ほか-』
日本文化財研究所1979『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告6

第2章 調査の成果

第1節 概観

検出された遺構は、古墳時代竪穴住居跡4軒、土坑1基、中世土坑10基、ピット66基である。遺構はいずれもⅢ層上面において検出された。竪穴住居跡4軒は形態や出土遺物などから7世紀前半の古墳時代後期の竪穴住居跡であると考えられる。古墳時代と思われる1基の土坑は、竪穴住居跡と重複して検出され、竪穴住居跡より古い土坑と考えられる。10基検出された中世の土坑からは遺物がほとんど出土せず、時期判断が困難であったが、わずかに出土した遺物や土坑の形状等から中世以降の土坑群であると考えられる。

検出された竪穴住居跡の遺存状態はあまり良くない。カマドが一部であるが確認できたのは4軒中2軒のみで、その2軒については北側に付設されている。調査区全体の遺物の出土量は、総じて少なかった。遺構番号については、すでに実施されている磯ヶ谷バイパス工事に伴う発掘調査から続く番号を使用した。なお、残存するカマドの構築材及び焼土、炭化材はスクリーントーンで示した。

第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

S I 0 3 0 (第8図、図版3・5)

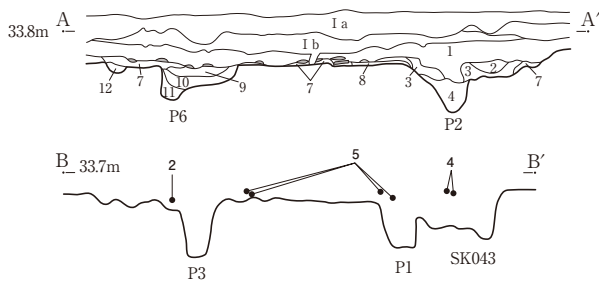
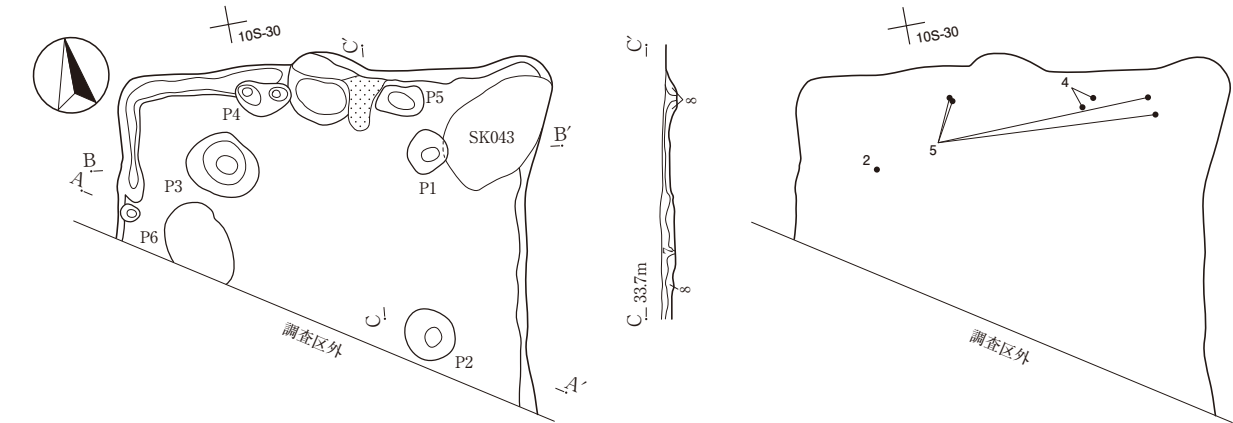
位置・形態 10S-30グリッドを主体として検出された。平面の形態は竪穴住居跡の南側が調査区外のため検出できていないが、隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は南北4.2m×東西4.5mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-10°-Eである。検出面から床面までの深さは、北壁14cm、西壁10cm、東壁14cmである。

覆土 黒褐色土を主体とし、ローム粒の混入が多く見られた。ロームブロックを含む層が2層確認されている。土層断面図で示したように貼り床の痕跡が確認され、平面形のプランを変えずに床を貼り替えていたことが推察される。

施設等 ピット6基とカマド及び周溝が検出された。P1～P3は竪穴住居に伴う支柱穴、P4・P5はカマドの両脇に隣接して検出されており、カマド施設の構築物に伴う支柱穴であると考えられる。P6は住居床面の下から検出されているため、本住居に伴うものではない可能性がある。床面からの深さはP1が60cm、P2が54cm、P3が67cm、P4の東側・西側共に26cm、P5が17cm、P6が40cmである。カマドの遺存はあまり良くなく片側の袖のみ残存している。周溝は北西隅の一部のみ検出された。

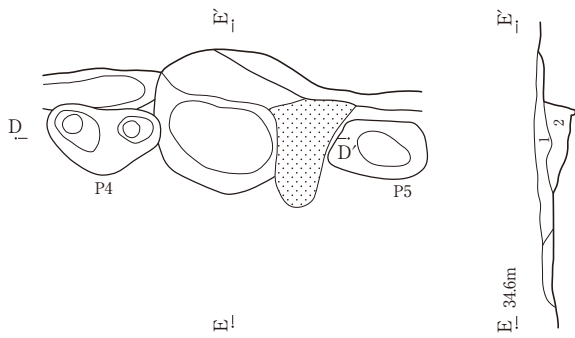
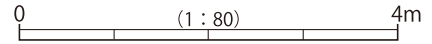
遺物出土状況 出土量は少ない。竪穴住居北側の覆土中からまとまって出土した。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器坏蓋のつまみ1点、土師器鉢1点、甕3点である。1は須恵器坏蓋のつまみで、灰黄色を呈する。焼成はあまり良くなく、つまみ以外の本体部分は欠損している。7世紀後半以降のものと思われ、覆土中に混入したものと考えられる。2は鉢の体部破片で、口縁部はヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整が施され、内面はミガキ調整で、黒色処理がなされている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径は復元径17.7cmである。3は台付甕の高台で、内外面ともにナデ調整が施され、明赤褐色である。底径は復元径10cmで、遺存度が低く口径・器高は不明である。4は甕の底部で、体部外面にはヘラケズリ調整が施される。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。底径は復元径9cmである。



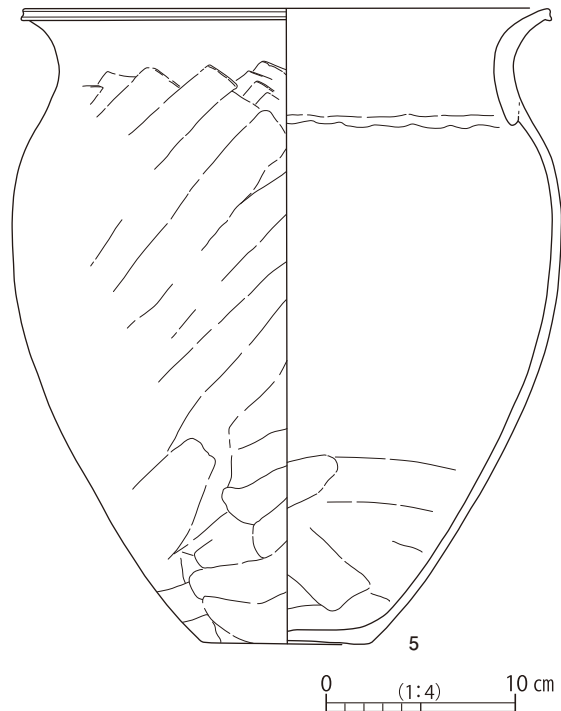
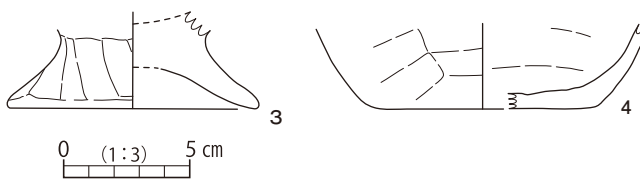
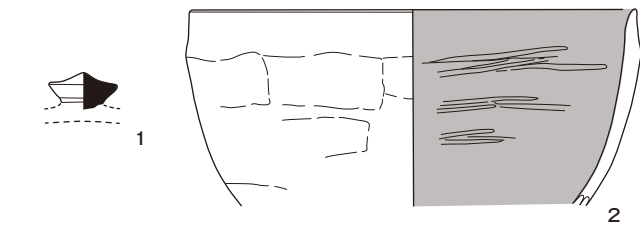
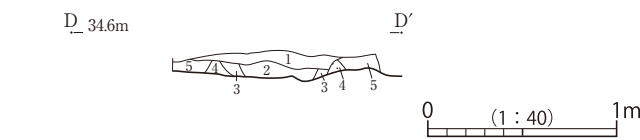
SI030

- I a. 暗褐色土：ローム粒微量
- I b. 暗褐色土：焼土粒・ローム粒・炭化物微量
- 1. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒・焼土粒・炭化物微量
- 2. 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒・炭化物微量
- 3. 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒微量
- 4. 黒褐色土：ローム粒少量
- 5. 黒褐色土：ロームブロックとの混成層
- 6. 黒褐色土：ロームブロックとの混成層
- 7. 黒褐色土：黄白色ロームブロック極まばら、黄白色ローム粒・赤褐色土少量、炭化物やや多量
- 8. 黒褐色土：黒褐色土と黄褐色土との混成層(貼床層)、
- 9. 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒微量
- 10. 黒褐色土：ローム粒やや多量
- 11. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒少量、焼土粒微量
- 12. 黒褐色土：ローム粒少量



SI030 カマド

- 1. 黒褐色土：焼土・炭化物・白色粒やや多量、ローム粒・粘土少量
- 2. 黒褐色土：ロームブロックやや多量、焼土・炭化物・白色粒少量
- 3. 黒褐色土：ロームブロック・焼土少量、白色粒微量
- 4. 黒褐色土：ロームブロックやや多量、白色粒微量
- 5. 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒・炭化物微



第8図 SI030

5は甕で、外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整が施される。胎土は砂粒や雲母を多く含み、焼成は良好である。器高は33.4cmで、口径及び底径は復元径で、それぞれ口径28cm、底径8.8cmである。出土遺物から、竪穴住居跡の時期は古墳時代後期と考えられる。

S I O 3 1 (第9図、図版3)

位置・形態 10S-20グリッドを主体として検出された。平面の形態は東西に長い隅丸の長方形を呈し、規模は南北2.6m×東西3.4mである。主軸方位はN-3°-Eである。後世の攪乱が著しく、カマドの遺存状態は極めて悪い。検出面から床面までの深さは、北壁8cm、西壁7cm、南壁12cm、東壁14cm、竪穴住居跡全体の遺存状態は良くない。

覆土 黒褐色土を主体とし、床面の一部でロームブロックが混入する貼床層が確認できた。

施設等 ピット1基が検出されたものの、支柱穴及び入口ピットは検出されなかった。検出されたピットの床面からの深さは21cmである。北壁中央部やや西寄りには煙道部状の掘り込みが見られたが、明らかなカマドの袖や火床面は確認されなかった。

遺物出土状況 遺物の出土はほとんどなく、覆土中から土師器が数点出土した。出土遺物から時期を決定しにくいものの、古墳時代後期の竪穴住居跡と思われる。

S I O 3 2 (第9図、図版3・5)

位置・形態 10S-42グリッドを主体として検出された。平面の形態は東西に長い隅丸の長方形を呈し、規模は南北3.4m×東西4.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-5°-Eである。検出面から床面までの深さは、北壁10cm、西壁12cm、南壁12cm、東壁16cm、遺存状態は比較的良好である。竪穴住居跡の中心部からカマドにかけて硬化面が検出され、生活の痕跡をよく残している。

覆土 黒褐色土を主体とする。竪穴の中央から焼土が確認され、床面直上から炭化材が比較的まとまって出土している。焼失住居の可能性もあるが、炭化材の量が多くないことや竪穴住居の南側から偏って出土している状況から、住居廃絶後に不要となった木材等を焼却した可能性も考えられる。

施設等 ピット8基とカマド及び周溝が検出された。P1～P4は規則的に配列されており、支柱穴と考えられる。P6・P7はカマドの両脇に隣接して検出されており、カマド施設の構築物に伴う支柱穴であると考えられる。床面からの深さはP1が38cm、P2が25cm、P3が30cm、P4が38cm、P5が12cm、P6が22cm、P7が22cm、P8が13cmである。P5は床面からの深さや位置から入口ピットと考えられる。北壁のカマドの袖や火床面の遺存状態はあまり良くない。周溝は北西隅の一部のみ検出された。

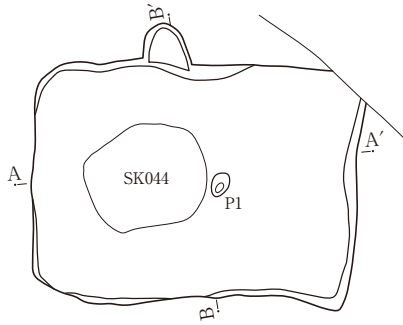
遺物出土状況 出土量は微量である。

出土遺物 図示できた遺物は、須恵器甕1点、土師器甕2点である。1は須恵器の甕胴部の小片で外面にはたたき目、内面にはナデ調整が施される。灰色を呈し、胎土は混入物が少なく、わずかに白色粒が混入する。2は土師器甕で、口縁部はヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整が施される。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径は復元径で11.5cmである。3は台付の小型の甕で、口縁部はヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデ調整が施される。調整が全体的に粗く、体部や高台下部外面には輪積痕が明瞭に見られる。台部は短脚で、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径11.5cm、底径8.5cm、器高12.6cmである。出土遺物から、竪穴住居跡の時期は古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。

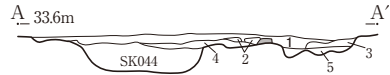
S I O 3 3 (第10図、図版4・5)

位置・形態 10S-76グリッドを主体として検出された。大部分が攪乱を受けており、北壁及び西壁の一

SI031



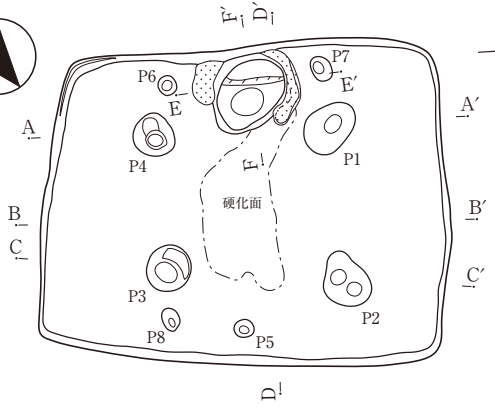
10S-22



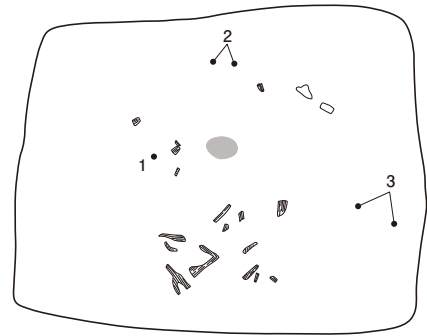
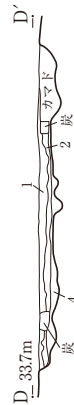
SI031

1. 黒褐色土：ローム粒少量
2. 黒褐色土：黒褐色土とロームブロック・ローム粒が混ざる（貼床層）
3. 暗褐色土：少量のロームブロックと褐色砂質土が混ざる（貼床層）
4. 黒褐色土：ローム粒少量（貼床層）
5. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量

SI032

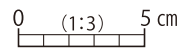
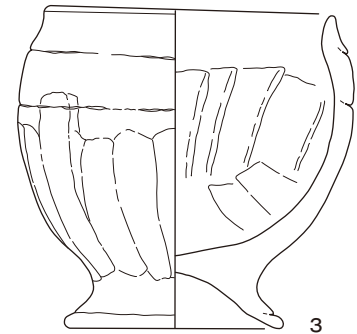
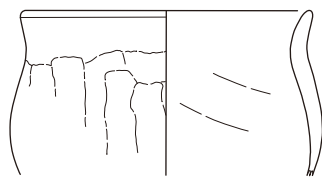
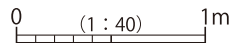
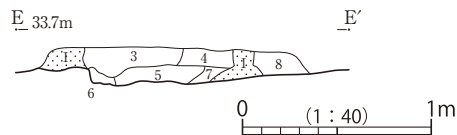
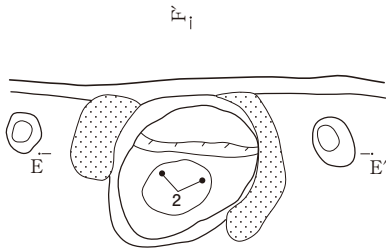
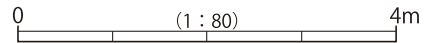


10S-44



SI032

1. 黒褐色土：ローム粒・炭化物・焼土粒少量
2. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒多量、焼土粒少量
3. 黒褐色土：ローム粒少量
4. 黒褐色土：ロームブロック少量



SI032 カマド

1. 黒褐色土：ローム粒少量、焼土粒微量
2. 黒褐色土：焼土粒・炭化物・褐色粘土少量
3. 黒褐色土：ローム粒・焼土ブロック・褐色粘土少量
4. 暗褐色土：褐色土多量、焼土粒少量
5. 黒褐色土：ローム粒やや多量、焼土粒少量
6. 暗褐色土：ローム主体、焼土粒少量
7. 褐色土：ローム主体
8. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒多量、焼土粒少量
1. 黒褐色土：ローム・粘土主体、焼土粒微量

第9図 SI031・SI032

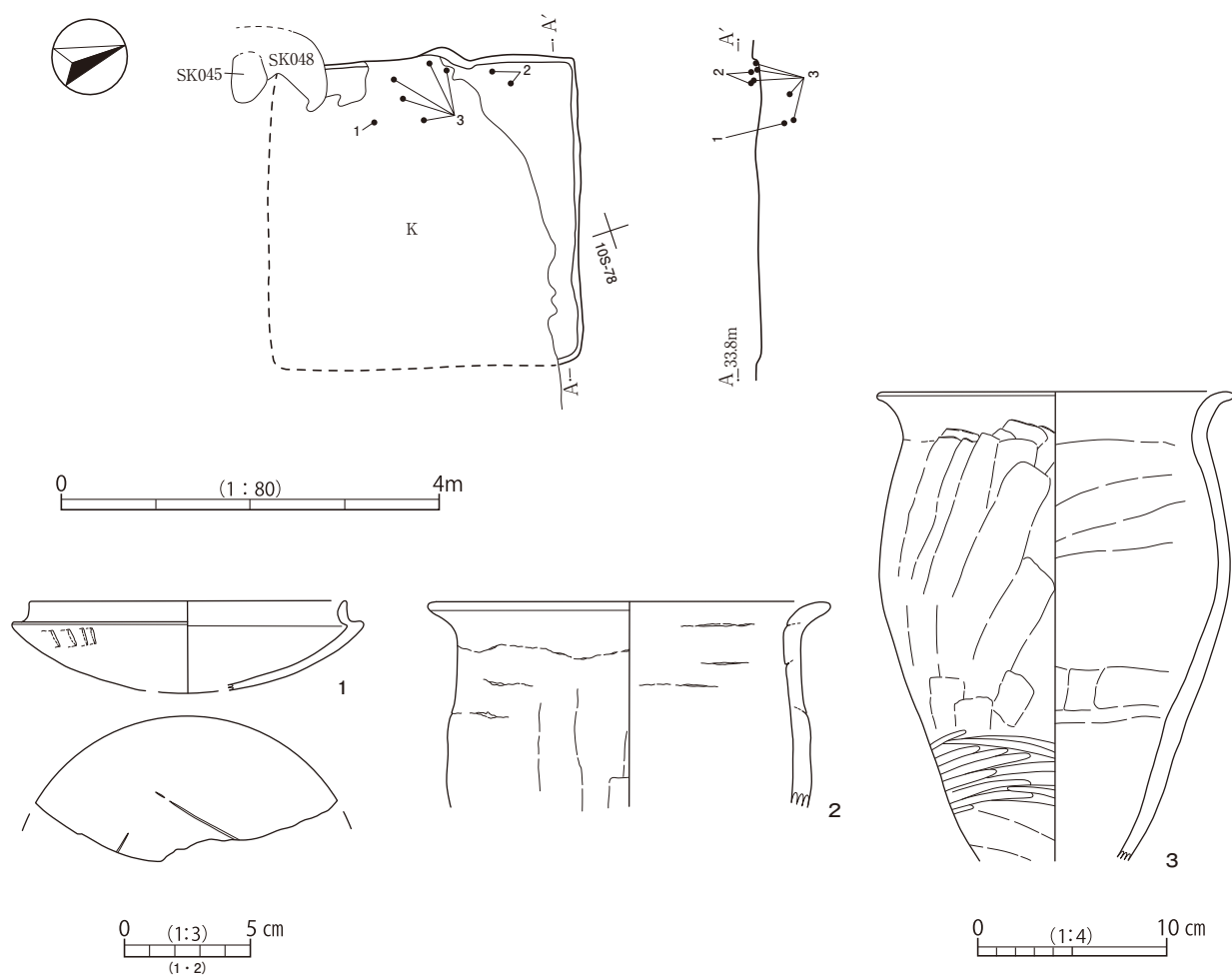
部と南西部のごく一部のみ検出され、一辺約3.2mの隅丸の方形を呈すと思われる。煙道部の張出が西壁に認められたもののカマドの構築材などは検出されていない。主軸方向はN-74°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁6cm、西壁8cm、東壁6cm、遺存状態は極めて悪い。

覆土 黒褐色土を主体とする。

施設等 竪穴住居に伴うピット等は検出されなかった。

遺物出土状況 出土量は少なく、西側の覆土中から出土している。攪乱内からの出土もあり、竪穴住居に伴う可能性があることから、ここでは住居内出土の遺物として記載する。

出土遺物 図示できた遺物は、土師器坏1点、甑1点、甕1点である。1の坏は、内外面ともにナデ調整が施され、一部ミガキ調整も見られるが、内外面ともに器面が荒れている。底部には細かい線刻が2方向に見られる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径は復元径12.6cmである。2は甑であろう。口縁部はヨコナデ調整、外面はナデ調整と一部ヘラケズリ調整が施されるが、一部調整の粗い部分があり体部の内外面には輪積痕が見られる。胎土には砂粒や雲母を多く含み、焼成は良好である。口径は復元径で16cmを測る。3は甕で、口縁部はヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整が中心であるが、体部下には横位ミガキの調整が施されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径は復元径で18.8cmである。底部を欠損しているため、底径・器高は不明である。出土遺物から、竪穴住居跡の時期は古墳時代後期と考えられる。



第10図 SI033

2 ピット群及び主な土坑

ピット群(第11図、第2表、図版2)

調査区東側で、平面形は長楕円形や円形、直径68cm～26cm・深さ118cm～10cmと形状も大きさも様々なピットが32基検出された。このほか土坑が3基検出され、そのうち集石や焼土塊などを伴う土坑2基については後に詳述する。ピット及び土坑の分布状況は第11図に示し、個々の遺構の規模については第2表に掲載した。覆土の堆積状況やわずかに出土した遺物から概ね中世後半以降であると考えられる。平面形や大きさ、配置に規則性が見い出せないため、個々及び群としての性格は不明である。

SK046(第12図、第2表、図版4)

11T-02グリッドを主体に東側ピット群内に位置する。平面形は長軸130cm、幅56cmの長楕円形で、重複するSH212より古い土坑と考えられる。覆土は黒褐色土が主体で、ローム粒や焼土、炭化物を含む。床面東側に集石部を伴っており、その周辺の覆土には炭化物が多く含まれる。

遺物は土師質土器片と礫が出土したが、図示できる遺物はなかった。調査開始当初は、礫が覆土中から散発的に出土していたが、掘削の過程で、土坑の一端に大小様々な礫の集石が検出された。礫は円礫を主体とし、合計156個が出土した。石材はチャート44個・ホルンフェルス5個・凝灰岩2個・砂岩66個・流紋岩及び石英斑岩36個・玉髓3個の6種類に大別できる。300gを超える礫もあるが、100g以下の小さい礫が主体である。完形も見られるが割れた個体も多く、熱を受けた痕跡が一部に見られたため、集石部分で火を扱ったことが推察される。第四紀の洪積層群によく見られる礫層から採取した礫とみられ、礫の材質に選択性は見られない。大きさにおいては、100g以下の比較的小さい個体が多いことから集積しやすいものを選んでいた可能性が考えられるほか、採集した礫層中の礫構成をそのまま反映していることも推察される。

土坑の左右に深さ20cm前後のピットSH211・SH232が検出されており、礫を集石した土坑に伴う上屋などの施設が存在していた可能性も考えられる。

SK049(第12図、第2表、図版4)

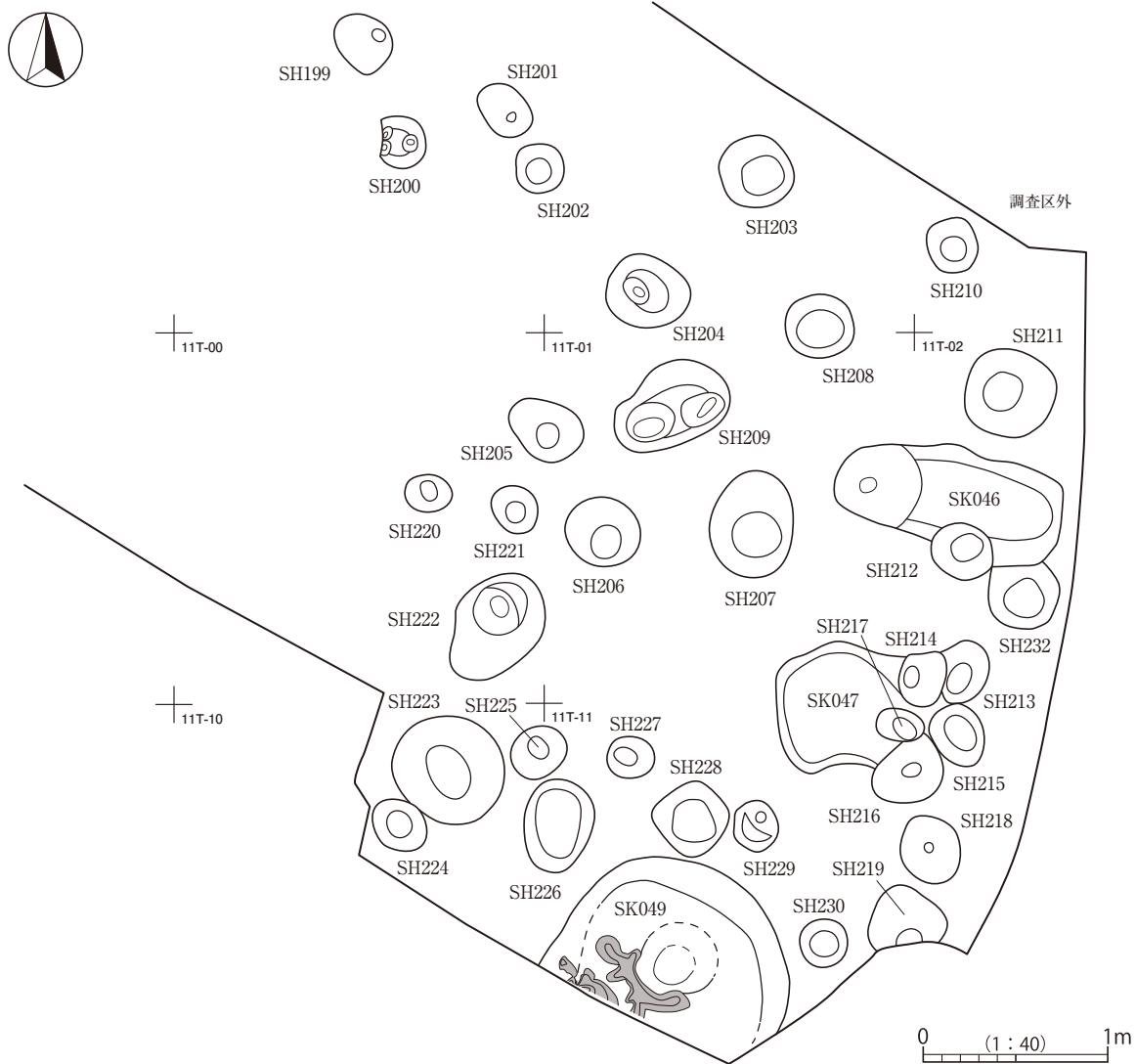
11T-11グリッドの東側ピット群内に位置する。南側の3分の1は調査区外のため未調査である。平面形は直径140cmの円形である。覆土は黒褐色土を主体としローム粒やロームブロック・焼土・炭化物を含む。焼土はロームを多く含み、しまりの強い塊状で出土した。土坑の半裁時にも焼土が確認されていたが、明らかな焼土塊は見られなかった。南壁で確認された焼土塊は調査区外へも広がると考えられる。焼土の中央にはピットのような浅い掘り込みが確認でき、その周囲を焼土塊で囲むような検出状況から、土器や鍋などが設置されていた可能性もある。ただし、鉄や銅のスラグなどの遺物は出土していないため、鑄造遺構の可能性は低い。また、焼土サンプルを洗浄し観察したところ、透明なガラス粒が多量に含まれていることが確認できた。

遺物は覆土中から土師質土器片・須恵器小片・カワラケが出土しているが、図示できたのはカワラケの小皿と坏の小片である。1はロクロ成形の小皿で遺存度が低く全体の30%である。口径は復元径7.5cm、器高1.1cmである。2は坏の小片で、遺存度はさらに低く15%程度である。

3 その他の土坑

SK039(第13図、図版4)

9R-74・84グリッドに位置する。重複した二つの土坑からなり西側をSK039A、東側をSK039Bとし、検

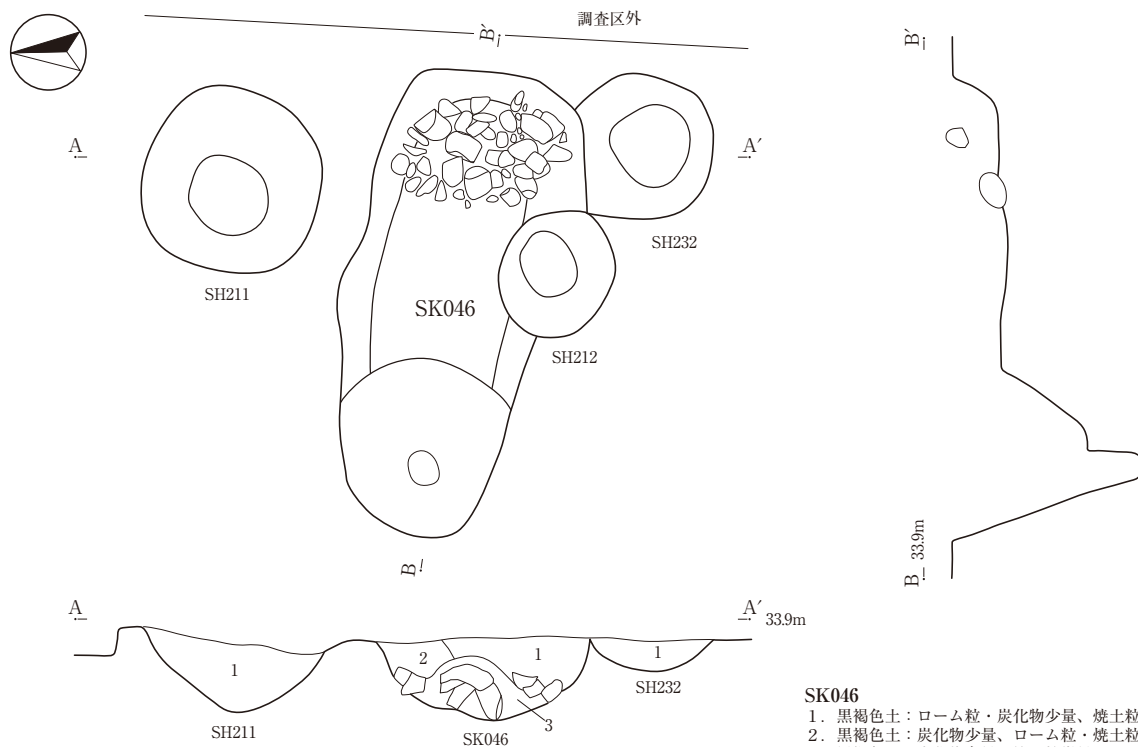


第11図 調査区東端部ピット群

第2表 調査区東端部ピット群遺構一覧

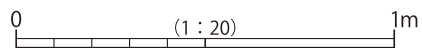
遺構番号	グリッド	平面形	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物	遺構番号	グリッド	平面形	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物
SK046	11T-01・02	長楕円形	130	50/15	土師質土器、礫	SH214	11T-02	楕円形	33	41	なし
SK047	11T-01・11	楕円形	68	7.4	なし	SH215	11T-12	楕円形	35	35	なし
SK049	11T-11	円形	94	51	土師質土器片・須恵器片 焼土ブロック・カワラケ	SH216	11T-11・12	楕円形	40	66	なし
SH199	10T-90	楕円形	34	48	なし	SH217	11T-11・12	楕円形	28	22	なし
SH200	10T-90	円形	29	118	なし	SH218	11T-12	円形	39	57	なし
SH201	10T-90	楕円形	32	42	なし	SH219	欠番				
SH202	10T-90・91	円形	27	24	なし	SH220	11T-00	円形	26	27	なし
SH203	10T-91	円形	40	68	焼け礫	SH221	11T-00	円形	28	28	なし
SH204	10T-91	円形	42	51	土師質土器片	SH222	11T-00	楕円形	66	64	土師質土器片
SH205	11T-00・01	楕円形	42	61	なし	SH223	11T-10	円形	62	32	なし
SH206	11T-01	円形	42	10	なし	SH224	11T-10	円形	32	19	なし
SH207	11T-01	楕円形	58	45	土師質土器片	SH225	11T-10・11	円形	32	59	なし
SH208	10T-91・11T-01	円形	38	31	なし	SH226	11T-10・11	楕円形	52	13	なし
SH209	11T-01	長楕円形	68	24	なし	SH227	11T-11	円形	27	29	なし
SH210	10T-92	円形	48	25	なし	SH228	11T-11	方形	38	31	土師質土器片
SH211	11T-02	楕円形	66	19	なし	SH229	11T-11	円形	27	27	なし
SH212	11T-02	楕円形	32	23	なし	SH230	11T-11	円形	27	14	なし
SH213	11T-02	楕円形	36	25	なし	SH231	欠番				
						SH232	11T-02	楕円形	38	12	土師質土器片

SK046

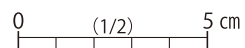
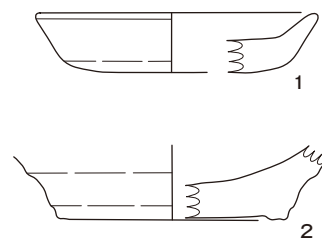
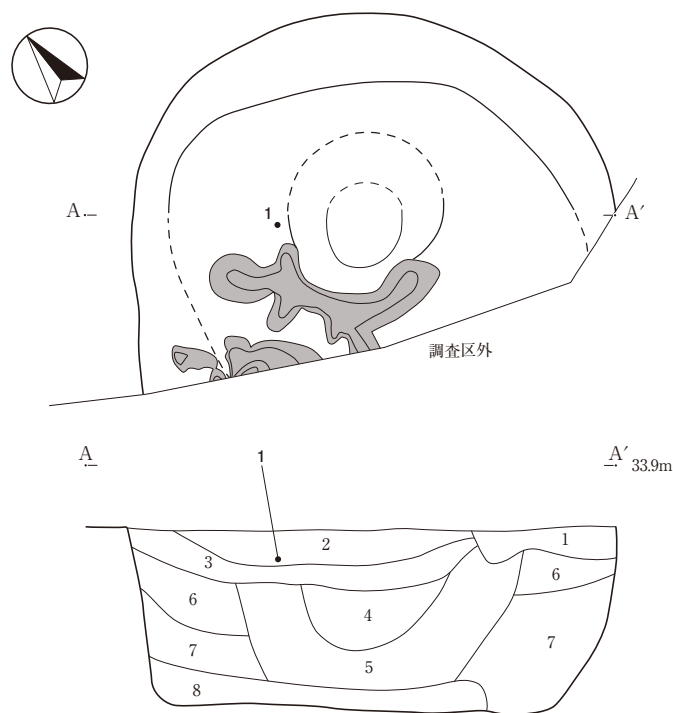


SK046

- 1. 黒褐色土：ローム粒・炭化物少量、焼土粒微量
- 2. 黒褐色土：炭化物少量、ローム粒・焼土粒微量
- 3. 黒褐色土：炭化物多量、焼土粒微量

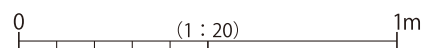


SK049



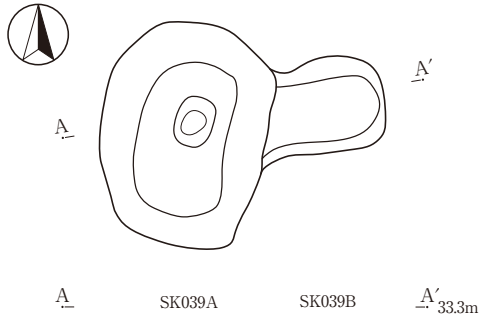
SK049

- 1. 黒褐色土：ローム粒・焼土粒・炭化物微量
- 2. 黒褐色土：ローム粒・焼土粒・炭化物少量
- 3. 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒微量
- 4. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒少量、焼土粒微量
- 5. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒やや多量、炭化物少量
- 6. 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック微量
- 7. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒多量
- 8. 黒褐色土：ロームブロックやや多量



第12図 SK046・SK049

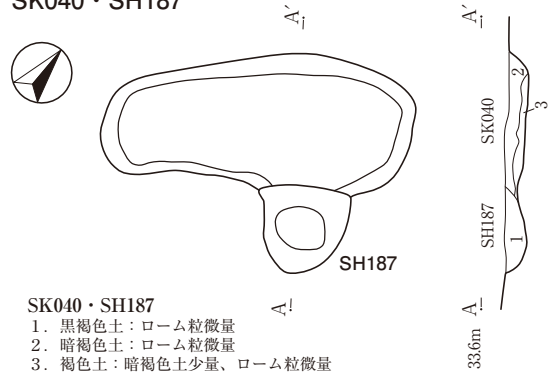
SK039



SK039

1. 暗褐色土：褐色土・黄褐色ローム少量
2. 黒褐色土：褐色土少量、ローム粒微量
3. 黒褐色土：褐色土少量、ローム粒微量
4. 暗褐色土：黄褐色ローム少量、ローム粒微量
5. 暗褐色土：黄褐色ローム・ローム粒少量

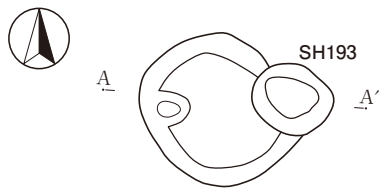
SK040・SH187



SK040・SH187

1. 黒褐色土：ローム粒微量
2. 暗褐色土：ローム粒微量
3. 褐色土：暗褐色土少量、ローム粒微量

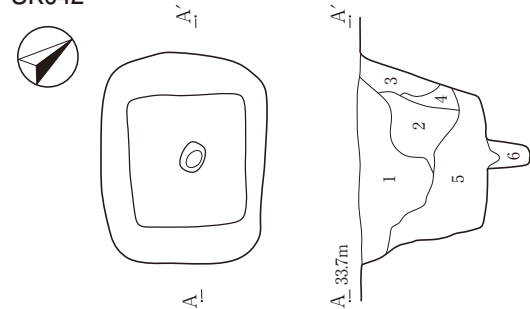
SK041・SH193



SK041・SH193

1. 黒褐色土：褐色土多量、ローム粒微量
2. 暗褐色土：橙スコリア・白色粒微量

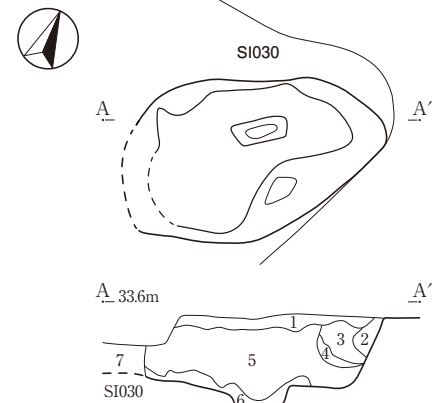
SK042



SK042

1. 暗褐色土：褐色土少量、黄褐色粒・砂粒微量
2. 黒褐色土：ローム粒微量
3. 黄褐色土：ローム主体、暗褐色土少量
4. 褐色土：ローム粒微量
5. 黒褐色土：ローム粒微量
6. 褐色土：黄褐色ローム少量

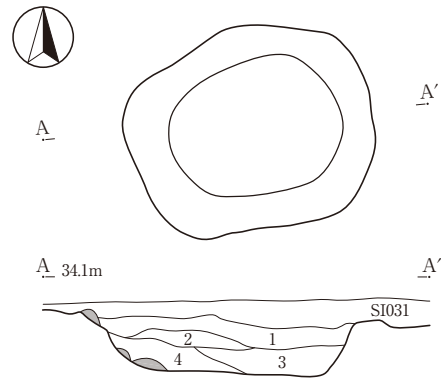
SK043



SK043

1. 黒褐色土：ローム粒微量
2. 褐色土：ローム多量
3. 暗褐色土：黄褐色ロームブロック少量
4. 黄褐色土：ロームブロック主体
5. 黒褐色土：ローム粒微量
6. 褐色土：黒褐色土多量
7. 黒褐色土：ロームブロック・赤色バミス混合

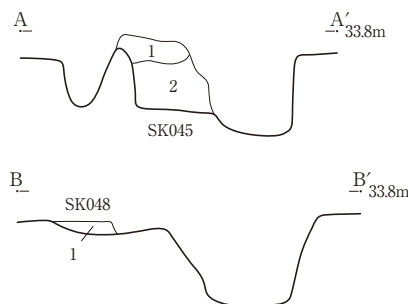
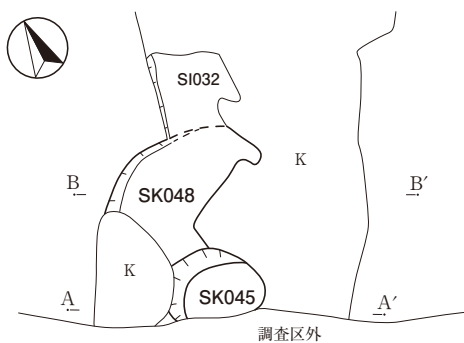
SK044



SK044

1. 黒褐色土：ローム粒微量
2. 黒褐色土：ローム粒微量
3. 黒褐色土：ロームブロック少量、ローム粒微量
4. 黒褐色土：ロームブロック少量

SK045・SK048

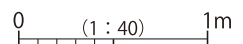


SK045

1. 黒褐色土：ロームブロック微量
2. 黒褐色土：しまり・粘性あり

SK048

1. 暗褐色土：しまり・粘性あり



第13図 SK039～045・048・SH187・193

出状況や覆土からSK039Aが新しい遺構であると考えられる。SK039Aの平面形は長軸120cmの長楕円形で、検出面からの深さは81cmである。底面ピットは長軸28cm、土坑底面からの深さは22cmである。覆土は両遺構とも暗褐色土を主体とし、遺物は出土しなかった。

SK040・SH187(第13図、図版4)

10R-29グリッドを主体に位置する。平面形は長軸166cmの長方形で、検出面からの深さは11cmである。本土坑に隣接して直径48cmの円形で、深さ11cmのSH187が検出された。検出状況や覆土からSH187が新しい遺構であると考えられる。覆土は暗褐色土を主体とし、両遺構とも遺物は出土しなかった。

SK041・SH193(第13図、図版4)

10S-54グリッドに位置する。平面形は直径84cmの円形で、検出面からの深さは17cmである。隣接してSH193も検出され、直径46cm、深さ14cmで円形のピットである。検出状況からSH193の方が新しい遺構であると考えられる。覆土は暗褐色土を主体とし、両遺構とも遺物は出土しなかった。

SK042(第13図、図版5)

10S-65グリッドに位置する。平面形は方形で長軸112cm、幅88cm、検出面からの深さ91cmである。底面ピットは長軸17cm、土坑底面からの深さは22cmである。覆土は黒褐色土を主体とし、遺物は出土しなかった。

SK043(第13図、図版5)

10S-31グリッドに位置する。平面形は長軸140cmの長楕円形で、検出面からの深さは52cmである。SI030の北東隅から検出され、覆土の状況から竪穴住居跡より新しい遺構であると考えられる。覆土は黒褐色土を主体とし、遺物は出土しなかった。

SK044(第13図、図版5)

10S-20グリッドに位置する。平面形は長軸130cmの楕円形で、検出面からの深さは35cmである。SI031の中央やや西寄りから検出され、覆土の堆積状況から竪穴住居跡より古いものと判断されることから、古墳時代の土坑と考えられる。覆土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器の甕の小片が数点出土したが、遺構の性格が判断できるものではなく、詳細は不明である。

SK045(第13図、図版5)

10S-86グリッドに位置する。攪乱による損壊が大きく平面形や大きさは不明である。検出面からの深さは26cmで、覆土は黒褐色土を主体とし、遺物は出土しなかった。

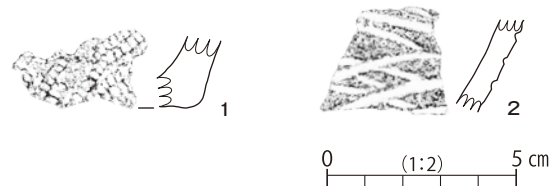
SK048(第13図、図版5)

10S-86グリッドに位置する。SK045に隣接して検出され、攪乱による損壊で平面形や大きさは不明である。検出面からの深さは7cmと浅い。覆土は暗褐色土を主体とし、遺物は出土しなかった。

4 遺構外出土遺物(第14図)

ここでは表土除去中や遺構検出中に出土し、帰属する遺構が検出されなかった遺物について掲載する。図示できた遺物は縄文土器2点である。

1は黒浜式と考えられる深鉢の底部破片である。胎土には繊維が含まれ、外面には底面近くまで縄文が施される。2は加曾利B式と考えられる精製深鉢の胴部破片で、胎土には白色粒子が目立つ。沈線による綾杉状文が施文されている。



第14図 遺構外出土遺物

第3章 総括

今回の調査では、459㎡という南北に狭長な調査範囲内で、古墳時代竪穴住居跡4軒、土坑1基、中世土坑10基、ピット66基を検出し、また縄文時代の土器、古墳時代の土師器・須恵器、中・近世のカワラケ、土師質土器が出土した。本章では、改めて松崎中里遺跡(4)の調査で検出された遺構・遺物について時代ごとにまとめる。

縄文時代

遺構は検出されなかったが、土器がごく少量出土した。土器の時期は、前期中頃の黒浜式と、後期中葉の加曾利B式である。既に行われたバイパス工事に伴う発掘調査では、縄文土器や石器も出土しているが、今回の調査では出土量も少なく縄文時代の痕跡は希薄である。縄文時代の包含層として一般的に見られるⅡ層が今回の調査範囲ではほとんど失われている点も、縄文時代の様相がわかりにくい原因になっているのかもしれない。

古墳時代

今回検出された古墳時代の遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑1基である。両遺構は調査区の中央部に集中して検出されている。出土した遺物は総じて少なかったが土師器を主体とし、時期としては概ね古墳時代後期の7世紀前半である。カマドは平面プランでは3軒に確認され、袖などの痕跡が遺構として確認できたのは2軒のみで北側に付設されていた。

遺跡範囲の中心部で行われた過去の発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の竪穴住居跡、古墳が多く検出されているが、今回の調査範囲は遺跡範囲の南東端部に位置し、古墳時代の遺構分布が希薄であることから、集落の外縁部にあたると思われる。このことから、集落の中心は、今回の調査地点より北西に位置していると想定される。

中世以降

今回検出された中世以降の遺構は、土坑10基、ピット66基である。土坑については調査区全体で検出されており、ピットについても調査区全域で検出された。東端部に集中して検出されたピット群は、規則的な配列は見られず、時期を決定できる遺物はほとんど出土していない。

10基の土坑は平面形が隅丸方形ないし楕円形を呈するものが主体である。遺物はほとんど出土しておらず、土師質土器及びカワラケが出土したのは、SK046とSK049のみであった。SK039とSK042は類似した形態で、底部に深い柱穴と思われる掘り込みが見られ、縄文時代の陥穴の様相を呈しているものの、覆土の堆積状況から中世以降の土坑であると判断したものである。

集石を伴うSK046と覆土に焼土塊を伴うSK049は特異な性格の土坑と考えられる。SK049からはカワラケが出土していることから中世の土坑と考えられる。両遺構は覆土に焼土や炭化物を含み、火を受けた痕跡のある礫や焼土塊が出土していることから火を伴う作業が行われていた可能性がある。しかし、鉄や銅のスラグなどの遺物が出土していないことから、鑄造遺構との関連は薄いのもかもしれない。特異な集石や焼土塊を伴う遺構については、類例の報告を待って遺構の性格を判断することとなるだろう。

写 真 图 版



松崎中里遺跡

遺跡周辺航空写真



調査前風景（西から）



調査区北西側遺構配置状況
（西から）



調査区東端部ピット群
（北西から）



SI030



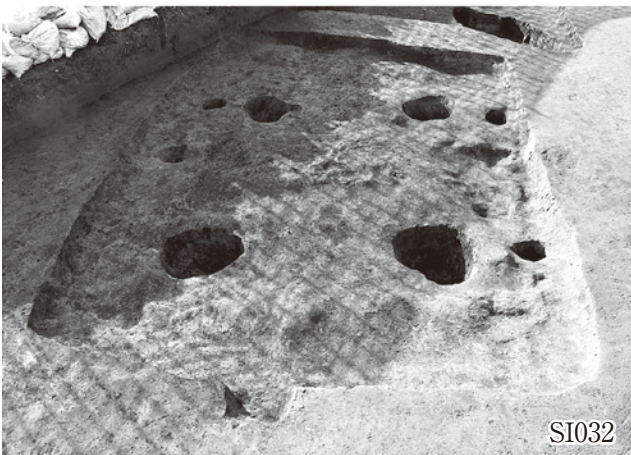
SI030カマド



SI030遺物出土状況



SI031



SI032



SI032カマド



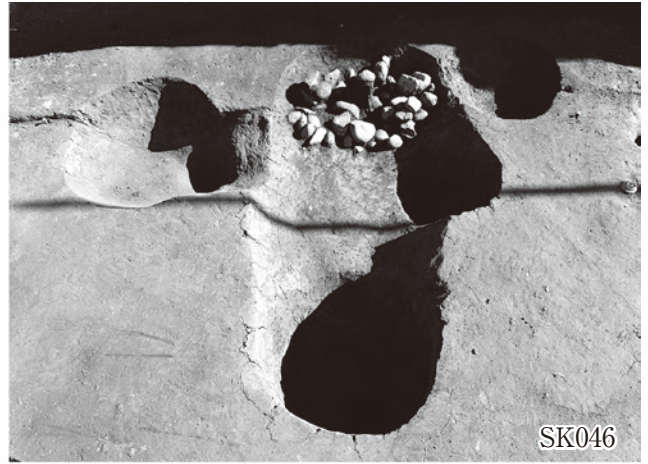
SI032遺物出土状況



SI032遺物出土状況



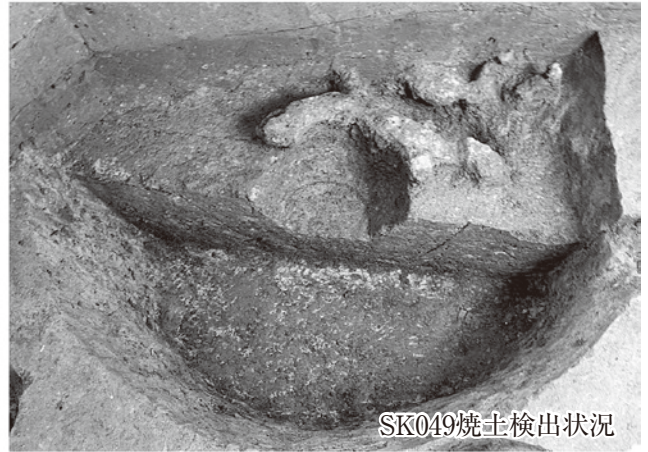
SI033



SK046



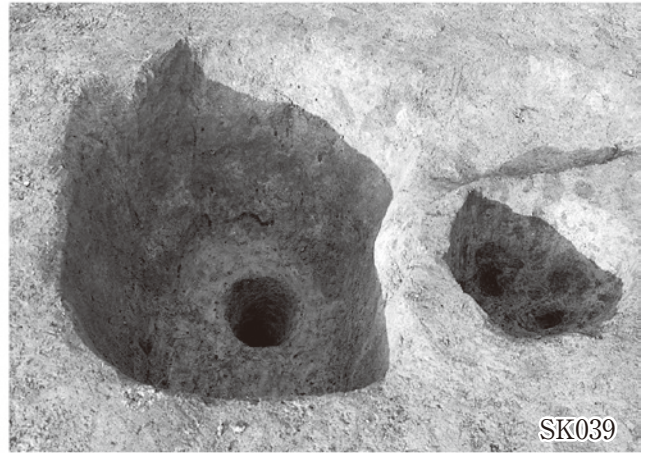
SK046集石状況



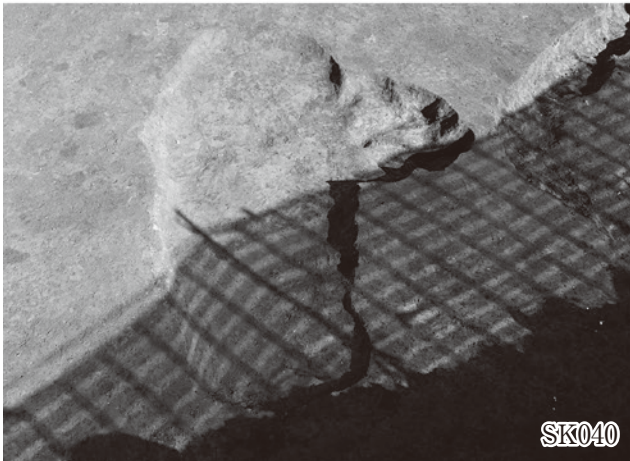
SK049焼土検出状況



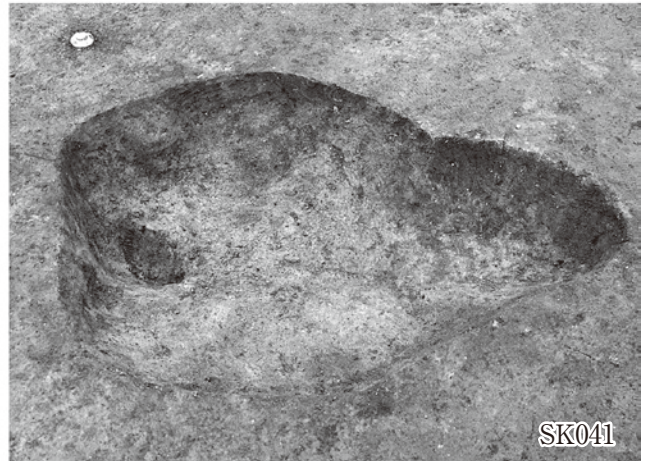
SK049



SK039



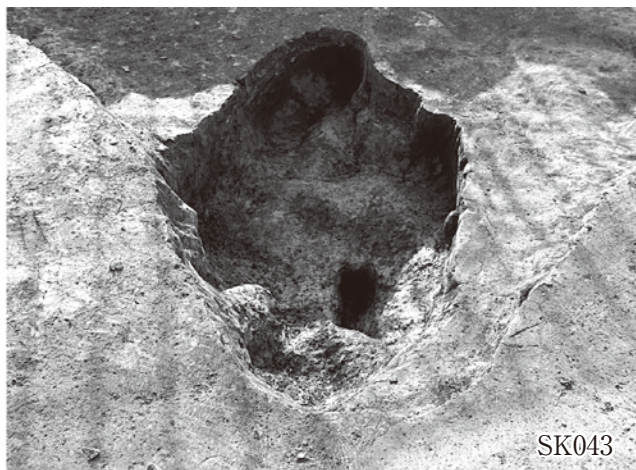
SK040



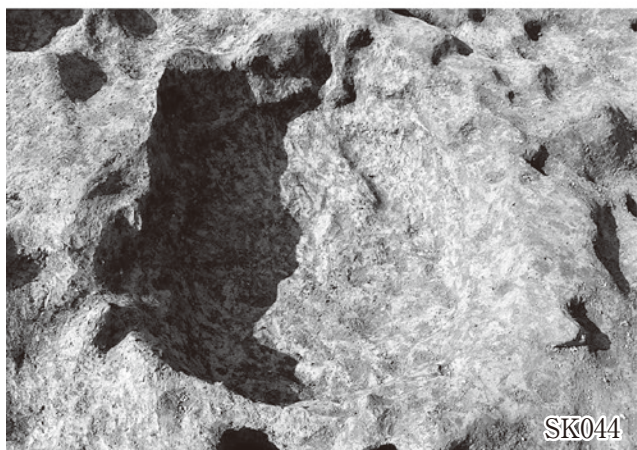
SK041



SK042



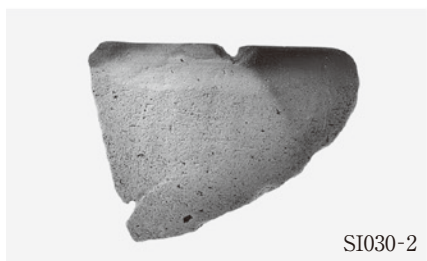
SK043



SK044



SK045 · SK048



SI030-2



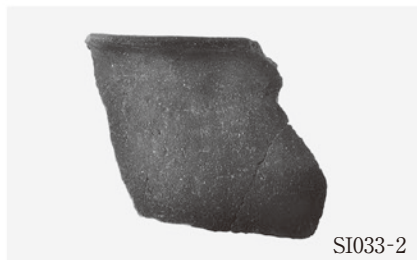
SI030-5



SI033-1



SI030-3



SI033-2



SI030-4



SI032-3



SI032-2



SI033-3

報告書抄録

ふりがな	まつぎなかがといせき(4)							
書名	松崎中里遺跡(4)							
副書名	県単交通安全対策事業(主要地方道市原茂原線)埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	速水成美							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2023年10月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつぎなかがといせき 松崎中里遺跡(4)	いちほらしまつぎあざ 市原市松崎字 ねもとだい 根本台48-4ほか	12219	096	35度 26分 60秒	140度 8分 36秒	20171101 ~ 20171231	459㎡	道路整備事業
				世界測地系				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松崎中里遺跡(4)	包蔵地 集落跡	縄文時代			縄文土器			
		古墳時代	竪穴住居跡4軒 土坑1基		土師器・須恵器			
		中世	土坑10基 ピット66基		土師質土器・カワラケ			
要約	<p>県道13号市原茂原線の歩行者道路整備に伴い実施した発掘調査である。本調査区からは古墳時代後期の竪穴住居跡や土坑を検出したほか、中世の土坑、ピット群が検出された。中世の土坑では礫を集石したものや焼土を伴うものなど特異な土坑が検出された。</p>							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第48集

市原市松崎中里遺跡（4）

-県単交通安全対策事業（主要地方道市原茂原線）埋蔵文化財発掘調査報告書-

令和5年10月26日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区市場町1-1

印刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2
